保育における「評価」の実践的価値について

1　「評価」という概念の捉え方

「評価」という言葉にはさまざまな教育的価値観・概念があり，それによって捉え方も異なっている。私が特別な興味をもつきっかけとなったのは，Ｊ，デューイの教育哲学について学び直す機会を与えられたことによる。彼の教育原理を成す，いくつかのキーワードに「コミュニケーション」「インタレスト」「経験の連続・継続」「相互作用による経験の質的変化」「成長」「アプリシエイション」（appreciation）という言葉がある。それぞれの言葉にはＪ，デューイに特有の教育学的な概念があるが，この紙上では割愛し，特に「アプリシエイション」の概念についてのみ記す。「appreciation」を辞書で引くと，次のように訳される。

○そのもの（こと）にふさわしい価値（真価）を認めること。

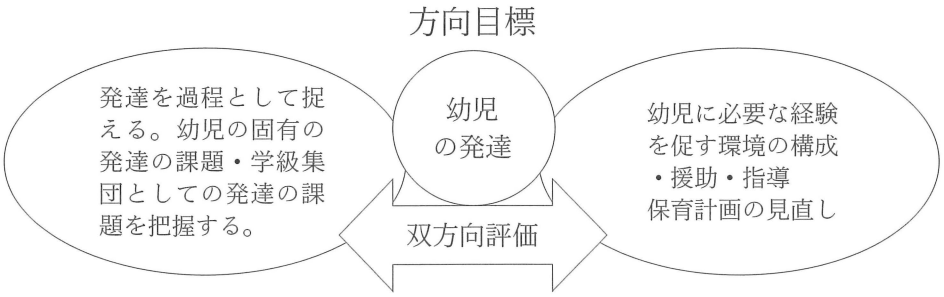
○正しい認識・理解　○評価をすること

教育の過程においてＪ，デューイが重視した「アプリシエイション」とは，人間の成長に必要な経験の連続において，経験の質的な高まりを形成する（または経験を質的に統一する）教育過程のすべてを通して働く，正しい認識・理解・そのもの（こと）にふさわしい価値を認める評価であると考えられる。

2　保育における評価の双方向性

保育における評価は，単に「ある能力を伸ばすこと」や「何かができるようになること」を目的にしているのではなく，あくまでも，**幼児一人ひとりのよさと成長の可能性を見出し育むことを目的としている。また，子どもたちが自分らしさ（個性と主体性）を十分に発揮して，発達に必要な経験を積み重ねていくようにするために，「保育の営み」を省察することである。**

評価は，その意味で一人ひとりの発達に対する個別かつ正確な理解を深める方向性と，保育者による「環境の構成」「はたらきかけと援助」「短期・長期の指導計画」の見直しなど，保育実践の省察と改善を見出していく方向とがあり，この二つの方向は，幼児を中心として下図のように双方向に相互作用する。



幼児の成長発達に関しては，内面からの育ちが重要である。内面からの育ち（自発的・自立的・主体的な心情・意欲・態度の発達）を促すためには，子どもの体験（体験の連続としての経験）の内容が的確に把握・理解できなければならない。そして，それがその子どもの成長・発達とどうつながっていくのかということを考えることが重要である。

3　実践記録からの幼児の経験や学びの読み取りと評価

附属幼稚園の実践研究の取り組みにおいて，本紀要に掲載されている（P.21参照）５歳児―７月の活動の記録から，筆者は以下のような幼児の経験と学びのつながりを考察する。

「バッタを採集し，育てる」という一連の活動の過程で，個々の体験は友達と相互作用する中で次のようなつながりを持って，共有する経験となり質的に変化している。

活動の期間	幼児が体験している内容（気づき・確かめ）	幼児が体験を通して学んだ内容
7月初旬	・バッタが大きくなったこと〈**気づく**〉 ・素手でバッタを捕まえる〈**よく観る・考える**〉	・バッタは成長すると大きさや色が変化すること。
7月15日	・バッタの色がちがうよ〈**疑問と興味を持つ**〉 ・なぜだろう？⇒もしかしたら・・〈**推測する**〉 「茶色いバッタは土の上でのかくれんぼが上手じゃないの？」 「緑のバッタは草の上でのかくれんぼが上手なんだ」 ・自分が考えたことを友だちに向けて話したり、友だちの考えたことを受け止めたりしながら、自分なりの確かめや理解をする。〈**かかわる**〉 ・推測したことを〈**確かめる**〉	・バッタを弱らせないための捕まえ方（手の形を変える） ・バッタの色と補色の関係 ・思いや考えをことばで表現すること ・バッタの生態
7月19日	・バッタが脱皮すること〈**気づく**〉 ・バッタは多量の草を食べること〈**気づく**〉	・バッタを飼うために必要なこと
7月20日	・夏休み中のバッタの生活に思いを馳せる 〈**バッタの立場から考える**〉〈**思いやる**〉	・バッタの生命を実感する ・バッタの生命を思いやる

(1) 諸感覚で感じ取りかかわる体験と，体験の連続としての経験から学びへのステップ

上記の記録（要約）から，幼児はまず諸感覚で生き物（バッタ）と触れ合い，次のようなサイクルを持ちながら対象（バッタ）への理解を深めていることが分かる。

ステップ1 対象（バッタ）への気づき⇒ 興味関心⇒疑問⇒推測⇒確認 ⇒ 気づく⇒考える⇒表現する

ステップ2 ⇒ 友だちとのかかわりの中での体験の相互作用 ⇒ より深い気づき

ステップ3 対象（バッタ）の立場から考える⇒思いやる＝ 経験を通した思考と学び

以上のように，幼児は興味関心⇒疑問⇒推測⇒確認⇒気づく⇒考える⇒表現するというサイクルをたどりながら，体験を重ねつつ，経験を通して考え，学んでいる。この学びは，単なる知識としての学びだけではなく，諸感覚を通して感じ，考え，気づいた結果としての心情や態度の変容（学び）である。ここに，幼児期の体験・経験と学びの相関性・連続性がある。

幼児期の「学び」とは，子どもがみつけたこと・確かめたこと・実感したこと・わかった（納得した）ことであり，過程としての経験を基盤として次の活動の中で働く，活用・応用する力であるといえる。

(2) 体験から経験・学びへとつなぐための保育の課題と評価

幼児の体験が一過性の遊びで終わっていたら，体験はそのときの一時的な記憶に過ぎなくなる。一人ひとりの幼児の体験が発達において意味を持つためには，次の三つの要素が不可欠の条件となる。

①教師がその体験（固有の体験）を的確に価値づけること（appreciation）

②活動の追求へつないでいく教師のことばやはたらきかけ

③友だちとの体験の共有

そのためには，幼児自らが興味を深めつつ，主体的に活動を追求していける環境と共有する場を意図的に構成していくことが大切である。「主体性」とは，幼児自ら課題をみつけ，願いや意図，目的をもって活動に取り組み，問題解決していく意欲や態度である。また，友だちと活動を共有し，考えを出し合い，共に目的や願いを実現しようとする心情・意欲・態度である。

保育を評価するとき，以上の観点から今後の保育の課題が明確に見出されることが求められる。

（共同研究者：島根大学教育学部人間生活環境教育講座　野津　道代）